



2024 年

12 月 第 1・2・3 週の主 日 礼 拝 説 教 要 約

- ・ 12 月 1 日 ヘブライ人への手紙 2 : 1 - 8 .
(1 - 18)

『 救いの創始者 』

- ・ 12 月 8 日 ルカ福音書 1 : 26 - 35 .

『 聖別された母親 』

- ・ 12 月 15 日 マタイ福音書 1 : 18 - 25

『 この世の父親として 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

《 救いの創始者 》

原典にはない聖書の見出しをそのまま説教題といたしました。異邦人キリスト者の書とされる“ヘブライ人への手紙”の受取人が、その名の通りヘブライ人だったのかどうかの確証はありません。後半で神殿祭儀に否定的な内容が含まれていることを考慮すると、この手紙(?)の読者は、これに賛同した人々なのか、そうではなかった人々なのかの憶測は困難です。さらに前者が異邦人(キリスト者)であり、後者だとユダヤ人(キリスト者)であると断定する根拠もありません。

さて、もし聖書の見出しのとおりイエス・キリストが、“救いの創始者”なのだとすると、それ以前には“創始者”は存在しません。さらに、“救い”がキリストの“試練”を通して成立した(2:18)こと、これが歴史上、最初の真の神の救いの出来事だったとすると、その“創始者”がイエス・キリストであるのは間違いなさそうです。

今日から始まるアドヴェントはその“救いの創始者”の誕生を待ち望ぶ期間です。ヘブライ人への手紙の中に数多く引用される“旧約詩篇”の中にも“主を待ち望め”という言葉がたくさん出てきます。ユダヤ人の集会所(シナゴグ)の礼拝で使用された彼らの讃美歌集が、この“詩篇”です。手紙の受取人たちは、おそらく初期のキリスト教徒であり、もしかしたら集会で“詩篇”に慣れ親しんだ人々で、そこでこの“手紙”も読まれたのだとすると、イエス・キリストの出現を待ち望み、また予見する旧約詩篇のメッセージと相俟って、重宝された文書となっていたのかもしれない。また、著者自身も同じような立場にあったキリスト者だった可能性も否定できません。

私は、兄弟たちに、あなたの名を告げ知らせ、集会の中であなたを
賛美しよう。

ヘブライ人への手紙の2章12節にあるこの詩篇(22:23)の引用は、おそらく“手紙”の受取人たちの集会の現状ともよく響き合うメッセージとなったであらう。

《 聖別された母親 》

おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。

マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を生む。その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と呼ばれる。神である主が、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。

聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを覆う。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる…（ルカ福音書 1：28 以下）

これが、ナザレの乙女マリアの前に出現した天使ガブリエルの言葉の集成です。実はこの後にも話は続くのですが、書き出すとかなりの量になります。相手の婚約者（ヨセフ）の夢に現れた天使のメッセージと比較すると遥かに大量のメッセージがマリアに届いていたことが分かります。月が満ちて神の子を産むマリアの労を、事前にねぎらう天の責任が、重大であることをよく示しています。

教会音楽ではこのメッセージに曲をつけてそのまま歌うことには何の抵抗もありません。後に、イエスの弟子となる者たちも、師イエスには同様の期待を寄せておりました。

一方、生まれて来るナザレのイエスの生き方を見ると、天の使いが予告していたものとは相当異なるものでした。古代、天使が神の使いである限りは、それなりの高い地位にあると思われたのですが、その地位は、時代が下るにつれて、徐々に低下してきたことが西洋絵画の中でもよく示されます。構図では、古代、高い位置に保たれていた天使（たち）は、ルネッサンス以降はマリアの前に跪くことに、相成ります。さらに聖書の“非神話化”の煽りを受けて歴史的には、殆ど影の薄い存在となりました。

ただ、この時にマリアを聖別したのは紛れもなく天使ガブリエルです。イエスが生まれるその“前”に、いわゆる“聖母”マリアがここに誕生したと考える人々がいたとしても不思議ではありません。ただ、このことが天使の使命だったのかどうかは、もう誰にも分かりません。

ダビデの子ヨセフ、恐れずマリアを妻に迎えなさい。マリアに宿った子は聖霊の働きによるのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。

天使がヨセフの夢に現れて語った言葉（マタイ福音書 1：20 以下）は、たったのこれだけです。というのも、マリアに現れた天使の大量のメッセージとは比較にならないほど少ないのです。それでも共通点があるとするなら、両者とも問答無用の通知だったことが挙げられます。

イエスの将来の“真実”との細かい整合性はいざ知らず、天からの告知には重いものがあります。かのモーセでさえも固辞することが憚られたのを思い出します（出エジプト記 3 章）。民を率いるのか（モーセ）、神の子を受け入れるのか（ヨセフ）。前者は 40 年を要し、後者は 30 年に満たなかった（？）かもしれませんが、いずれにしてもその重責からの解放は、“請負人”の死をもって成立したのかもしれませんが。妻に迎えるマリアとともに、まだ人類の誰一人、経験したことのない使命としての子育てです。神の計らいには期待しつつも、その子育ての大変さはルカ福音書に出て来る、初子のイエスの神殿詣でにおける預言者たちとの突然の出会いや、マタイ福音書の東方の博士らの来訪、家族三人によるエジプトへの命がけの避難、さらにルカ福音書による“少年イエス”のエピソードを見てもよく分かります。子供ながらも神の自由は人間の制御の下には置かれませんが、のちにエルサレム神殿の崩壊を予告する張本人であっても、少年時代のイエスにとっては、（ヘロデ大王が建てた）エルサレム神殿がなおも“（天の）父の家”であることにかわりはなかったことを読者は思い知らされます。この世の父親ヨセフの心労は計り知れません。

カトリック教会が“策定”した守護聖人のリストによるとこのヨセフは“労働者”等の守護聖人に指定されています。これは彼の職業が大工であり、身を粉にして“家族”を養ったためだと考えられますが、人類の誰もが経験したことのない“重労働”が、どの程度、考慮（？）されての“策定”だったのか、その経緯は、もうよく分かりません。